
アグネス文庫 「 野菜工場の少女アグネス 」

agnes

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アグネス文庫 「野菜工場の少女アグネス」

【Nコード】

N15670

【作者名】

agnes

【あらすじ】

夜になると、畑の中に小さな野菜工場が現れます。

毎日、美味しい野菜を朝までに実らせるのが、少女アグネスの仕事です。

そんなある日、野菜工場を襲う大事件が occurred。美味しく実のらせるはずの野菜が、何者かに奪われてしまったのです。

知らずに食べた人々は、野菜が嫌いになり、地球からやがて、野菜が消えてしまいます。

アグネスとネオールは奪われた野菜を探しに、暗い夜空の中へと飛びたって行ったのでした。

a g n e s

1話 愛の奇跡と青いトマト

> i 1 2 3 9 2 — 1 7 4 9 <

> i 1 2 3 9 0 — 1 7 4 9 <

「野菜工場の少女アグネス」

> i 1 2 5 4 0 — 1 7 4 9 <

・ ・ 1話 愛の奇跡と青いトマト ・ ・

人々が寝静まったところ、
野菜畑の中に野菜工場が、
姿を現します。

「みなさん！

朝までに美味しい野菜を仕上げて下さい」

アグネスが大きな声で言いました。
少女アグネスは野菜工場のお姫様。
美味しい野菜作りが、
王様から与えられたアグネスの仕事です。

「今日は天気が悪かったので、

トマトには赤いシロップ、

キュウリには緑のシロップを、

たくさんお願いしますね」

アグネスは、カールおじいさんに言いました。

カールおじいさんは、

野菜を甘く色を付けるのが仕事です。

「ヘイ！アグネス姫様」

ニツコリとうなずきながら、

カールおじいさんが言いました。

その時、

遠くから、

アグネスを呼ぶ声がしました。

「アグネス姫様！大変です！」

カールおじいさんの孫の、

ペーターが大声で走ってきました。

「ペーター？・・・どうしましたか？」

アグネスが、聞きました。

「大変なんです！」

真っ赤にする筈の青いトマトが見当たりません、

それに野菜置き場が、

メチャクチャになっています」

おじいさんにすっかり管理するように言われていたのに・・・」

そう言うところペーターは泣き出してしまいました。

「そりゃあゝ大変だ！」

もしも美味しい味を知らない子どもたちが、

青いトマトを食べたら、

えらいことになるじゃろうなあ！？・・・」

カールおじいさんが心配そうに言いました。

アグネスは暫く考え、

ネオールならきっと探し出してくれるに、

違いないと思いました。

> i 1 2 3 8 8 — 1 7 4 9 <

泣いているペーターの頭を撫でながら、
心配いらないうと、

アグネスは優しく言いました。

そしてカールおじさんに、

ネオールを呼んで来るように頼みました。

カールおじさんは、

急いでネオールのもとへ向かったのです。

「アグネス姫、

カールおじさんから話は聞きました。

早速、探しに行きましょう」

ネオールとアグネスは夜の道案内が得意な、
ホタルのテンに乗り探しに行きました。

ホタルのテンは2人を乗せ、

大地を明るく照らしながら、

空に舞い上がりました。

「テン！

この青いトマトの匂いを追ってくれ」

ネオールはそう言うと

青いトマトの匂いをテンに嗅がせました。

テンは空を一周すると、

北に向かって飛び始めました。

> i 1 2 3 9 4 — 1 7 4 9 <

北に飛ぶテンに、

ネオールは思い出しました。

「アグネス姫、

北には恐ろしい魔女が住んでいます」

ネオールは魔女の事を、

母に聞いたことがあったのでした。

「それに北の魔女は、

野菜が大嫌いと聞いたこともあります、

もしかすると魔女は青いトマトを野菜好きな人々に食べさせ、

地球から野菜を無くす気かもしれません」

それを聞いたアグネスは、
急いで王様に電話をしました。

「おお・・・アグネスよ、

なんたることじゃ・・・、

北の魔女に勝つには3つの愛が必要なのじゃが・・・」

そう言う王様は黙ってしまいました。

「お父様！ 教えて下さい」

王様は深く考え込みました。
今まで勇敢な騎士たちも、
3つの愛を手にした者は無く、
魔物に殺されてしまったからです。
そしてアグネスに言いました。

「3つの愛を手にするには、

知恵と勇気と愛が必要なのじゃ、

アグネスよ！

ネオールとともに、

この3つの困難を乗り越えられるかのう？」

と王様が聞きました。

アグネスは知恵と優しさが自慢の王様の娘でした。
ネオールは王様が将来、

後を継がせたいと思うほど、

目にかけている勇敢な少年です。

それでも王様は心配でなりませんでした。

> i 1 2 3 9 5 — 1 7 4 9 <

「お父様・・・

私はどんなに怖くても行きます！

教えてください！」

アグネスは野菜嫌いを救うために、
恐ろしい困難を、乗り越える決意をしたのでした。

「アグネスよ・・・ならば聞くがよい」

そう言うと王様は、

1つ目に必要な龍の住む湖の愛の水のこと、

2つ目に必要な大蛇の住む谷の愛の土のこと

そして・・・

3つ目に必要なのとはおうとした王様は、

電話をネオールに代わるようにアグネスに言いました。

今はまだ3つ目に必要なことを、

アグネスには言えなかったのです。

「えっ！・・・」

王様の話しを聞いたネオールは驚き、

3つ目に必要な愛・・・に、

空を見上げました。

「王様・・・約束します」

そう言うとネオールは電話を切りました。

アグネスは不思議そうな顔でネオールを見つめました。

でもネオールは王様と約束したので、
アグネスには何も話せませんでした。

「アグネス姫！ 急がねばなりません！」

そう言うとネオールは、

テンの向きを変え、

北の魔女から青いトマトを取り返すために、
アグネスと危険な龍の住む湖に向かうのでした。

> i 1 2 3 8 9 — 1 7 4 9 <

次回「龍の住む湖」 2話

お樂のしみに！

a g n e s

2話 龍の住む湖

童話 「野菜工場の少女アグネス」

> i 1 2 5 4 0 — 1 7 4 9 <

2話・・・龍の住む湖・・・

真つ暗な湖の真中に、

岩石で作られた城があります。

その城は、

オレンジ色の不気味な光を放っていました。

> i 1 2 5 4 1 — 1 7 4 9 <

「アグネス姫、

きつとあそこが龍の住みかです。

降りますよ、

シッカリつかまっけていて下さい。

テン！

灯りを消してあの岩陰に降りてくれ」

ネオールは龍に見つからないために、
テンに岩陰を指さしました。
龍の城に着いたアグネスとネオールは、
岩の隙間から、
そつと龍のようすをのぞきました。
愛の水を取りに来たことを知らない龍は、
深い寝むりについていました。

「龍が寝ている間に、

手に入れて帰りましょう。

でもこの隙間からは入れそうにありません、

私が探してまいります」

ネオールはアグネス姫を残して、
城の中に入れそうな場所を探しに行きました。
城の上には龍の飛立つ扉がありました。
でも岩壁はけわしく、
とても歩いては登れません。
テンで舞い降りると龍に見つかってしまいます。

「アグネス姫!？」

城の中に入れそうな場所が見当たりません・・・」

ネオールは困ってしまいました。

「この岩・・・もしかすれば?・・・」

アグネスは何かいい方法を思いついたようです。

「確か?岩石は・・・」

砂岩、泥岩、れき岩という成分から

出来ているはずなんです。

テン!

急いでお願いしますね」

テンはアグネスから頼まれると、

湖に向かい飛び立ちました。

そして大きな花びらを持って帰ってきました。

アグネスは岩をさわりながらテンに言いました。

「テン！」

ここにかけるのよ」

花びらの中に入った、

たくさんのお水を、

アグネスの指差す岩にかけました。
なんということでしょう？、

岩がとけていくではありませんか。

岩は色々な成分から出来ていて、
水によわい岩石があることを、

アグネスは知っていたのでした。

「凄い！凄い！」

さすがアグネス姫！」

ネオールは大喜び、

テンと抱合い踊りました。

「ヤッタネ！」

褒められたアグネスも思わず、
ガッツポーズをしました。

でも城の中からは

寝ている龍の口から吐きでる炎の音が、
不気味に響いていたのでした。

> i 1 2 5 4 2 — 1 7 4 9 <

「さあ 行きましょう」

「はい！ ネオール」

部屋の中にそつと入った2人は、
音をたてないように探し始めました。

「ないなあ・・・」

「どこだろう？」

いくらさがしても見つかりません、
もしかすると龍は愛の水を遠くに隠して、
ここには置いてないとネオールは思いました。

「ネオール？」

この鏡はなんでしょう？」

アグネスがネオールのそばに近づこうとしたその時です。

「キャー！」

ガシャーン！！」

アグネスは持っていた鏡を床に落としてしまいました。

「誰じゃ！？

よくも我が城に！！

たとえ小僧とて、

生きては2度と帰さんぞ！」

目をさました龍が口から炎をはきながらにらんでいます。
ネオールは剣を抜き、

恐ろしい龍と戦う決意をました。

> i 1 2 5 4 3 — 1 7 4 9 <

「ここで死ぬ訳にはいかないんだ！

お前になんかに、

負けないぞー！」

「あははは・・・バカな小僧よ！

我に勝てるものか！！！」

大声で笑いとばした龍は、
ネオールめがけて襲ってきます。
ネオールは岩から岩に飛び跳ねて
龍の背中に飛び乗りました。

「覚悟しろ！」

そう言いながら高く剣をふりあげ、
龍の急所をめがけて振りかざしました。

「えっ！・・・」

ネオールは叫びました。

龍の甲羅の硬さに、

剣が折れてしまったのです。

「小僧！ そんな物でこの俺は殺せんぞ！」

龍は誇らしげに言いました。

そして背中のネオールを振り落とそうと暴れ廻りました。

「アグネス姫！」

龍の弱点は・・・！？

必死に龍の背中にしがみつきながらネオールが叫びました。

「私にもわからないわ！」

優しいアグネスには
龍の退治のしかたなど、
わかるはずがありませんでした。

「ネット情報で検索すれば、
わかるかもしれません！」

「あつ・・・そうね！」

アグネスは携帯を取り出して、
急いで龍の弱点を検索しました。

「あつたわ！」

ネオール！　目よ！」

そう言いながらアグネスは、
ハンカチをネオールに投げました。
ハンカチを受け取ったネオールは、

不思議に思いながらもひたいの汗をふきました。

> i 1 2 5 4 4 — 1 7 4 9 <

「ネオール！ 何してるの？」

「汗を・・・？」

「ネオール違うでしょ！」

ハンカチで龍の目を隠すのよ！」

「あ！ そっか！」

ネオールは恥ずかしくて、
顔が真っ赤になりながらも、
急いで龍の目をハンカチでふさぎました。
龍は目が見えないと力も消えてしまいます。

「何も見えん！」

小僧！ ゆるさんぞ〜」

目が見えない龍は岩石の壁にぶつかりながら、ネオールを振り落とそうと暴れました。

その激しさに天井の岩がくずれて、

龍の頭に落ちました。

龍は気絶して地面に倒れました。

龍の足も傷ついて血が流ています。

ネオールはロープを取り、

龍の体を急いでしばらくとしました。

「やめて〜 ネオール！！」

私たちの勝手な理由で、

やっぱり龍をイジメてはイケないわ！」

アグネスは龍の血の流れる足にハンカチを巻いて、自分の髪にしていた、バンドでとめてあげました。

そしてまだ気絶している龍の体をさすりながら、

美味しい野菜が魔女に奪われ、

この世から消えてしまうことや、

何故この龍の湖にきたのか、

理由を話して誤りました。

「帰りましょう・・・ネオール」

「えっ！・・・いいのですか？」

「ええ・・・」

いかなる理由でも力で奪うことは許されない、

そんな当然なことさえ忘れて・・・

そのうえケガもおわせてしまったわ・・・

「ごめんなさい」

確かにアグネスの言う通りだとネオールも思いました。
でも困ってしまいました、

愛の水がないと魔女には勝つことができないのです。

その時です、

突然、龍の顔が光りだしました。

気絶から目覚めた龍は、

そのまま目を閉じて話を聞いていたのです。

そして流れでた涙が黄金に光輝いていたのです。

「もって 行くがよい！」

我の涙をアグネスにさずけよう

これこそが・・・

皆が求める愛の水じゃ！」

龍はネオールに黄金に輝く愛の水を渡しました。

愛の水それは・・・

正しき愛に龍の心が満ちあふれ、
流れ出た涙のことだったのです。

龍はハンカチのお礼に、

友の証である水色に輝く指輪をアグネスに与えました。

アグネスとネオールは龍にお礼を言うと急いでテンに乗り、
大蛇の住む谷に向かいました。

「アグネス姫！ 良かったですね」

「そうね ネオール」

2人の顔から笑みが何度もこぼれました。

「テン急げ！」

大蛇の住む谷にゴーだ！」

ネオールはアグネスに、
カッコ良く見られるようにテンに言いました。

「大蛇の住む！？・・・」

何処か知りませんか？・・・」

「ありや・・・」

頭をかきながら東の山をテンに指差しました。
ネオールは恥ずかしくて後ろを振り向けずにいます。
でもその姿が何故かアグネスには、
たのしくも見えたでした。

「ネオール、

陽が明ける前に工場に戻らねばなりません、

急いで下さいね」

「はい！ おまかせ下さい」

こうして愛の水を龍の住む湖から手にいれた2人は、
愛の土を求めて
大蛇の住む谷に向かったのです。

> i 1 2 5 4 5 — 1 7 4 9 <

3話 「大蛇の住む谷」
お楽しみに。

a g n e s

3話 「大蛇の住む谷」

> i 1 2 5 4 0 — 1 7 4 9 <

「野菜工場の少女アグネス」

> i 1 2 5 4 5 — 1 7 4 9 <

3話・・・大蛇の住む谷・・・

アグネスとネオールは龍から授かった愛の水を手
に、東の山深くに居ると言われる大蛇の谷に、
愛の土を求めて向かったのです。
ネオールはお爺さんに聞いた大蛇の話をアグネスに語りました。

「大蛇には人類はるか以前昔からの言い伝えがあります

地球が出来た時そこには焼け付くほどの大地しかありませんでした、

大地の土地から出た熱は蒸気となり、

雨を降らせ海を作り、

そして植物を生みました。

大地はやがて土からさまざまな生物を作り、

大地は大切な大地を大蛇に守らせていました。

そして地球上のすべての生命を守ることの出来る、

知恵や言葉を持つ強い人間を、

土と動物の骨と肉から作りました。

けれど人々はその力で、

争いや奪いあう日々を繰り返すようになりました。

見かねた大蛇は大地を揺らして、

争いや奪いあう人々を、海の中に沈めてしまったのです。

そして残った人々の心を導こうとしました。

けれど人々の邪悪な心はやがて大蛇をも、

2度と出られぬ東の谷の洞窟に封印してしまいました。

それから2万年・・・、

今も大蛇は封印された谷にいます。

お爺さんが言っていました

・・・」

「あつ！・・・

あの谷・・・！！」

行く手に黒い霧に包まれたの谷が見えました。

近づくにつれその奥に大きな洞窟が不気味に口をあけています。

そつとアグネス達は洞窟の入口に舞降りました。

洞窟の中は奥深く続き暗くて何も見えません。

ネオールはテンに中を照らすように言うと、

勇気を振り絞り、

ひとり先に奥へと進みました。

「アグネス姫！

来てください！」

テンを連れ、

アグネスは急いでネオールのもとに向かいました。

そこには大きな石の扉があり、

その扉には何か書いてありました。

テンが扉を明るく照らすとアグネスが言いました。

「この文字は・！？・・・

間違いないわ！！

古代メソポタミヤ時代の文字です。

最初の文字

これは呪文のしるしの呪いが刻まれてるわ！。

次は大地の大をあらわしているみたい。

その次の文字は・・・

思いだせないわ？

前が大だから・・・

その次はたぶん蛇だと思うのだけど・・・？」

アグネスは不安になりました、

それは蛇ではない気がしたからです。

知らないネオールとテンはこれで扉が開くと思い、
喜び無邪気にはしゃいでいます。

「ネオール！」

喜ぶのはまだ早過ぎますよ！

読んだだけでは中には入れないでしょう！？」

「えっ！？・・・」

普通は読めば扉が・・・？」

「もう バカ！ネオールったら！！」

最初に喜んだのはテンだよと言いながら、
ネオールはテンの後ろに隠れました。

それを聞いて慌てたのはテンです、
羽をパタパタさせて、
違うとアグネスにアピールしたのでした。

> i 1 2 8 4 9 — 1 7 4 9 <

そして簡単に呪文を解くことが出来ないと知った2人は、
手分けして探すことにしました。

文字の読めないネオールは、
ネット検索で呪文の言葉を探すことにしました。
アグネスとテンは洞窟内に刻まれた文字を解読して、
扉を開ける呪文の手がかりを探しました。
洞窟の壁には逃げ惑う人々様子が鮮明に描かれ、
石板には、
「やがて、姿を変え人々に天罰を下すであろう」
と書かれています。
けれど洞窟に刻まれた文字や壁画からは、
呪文の手がかりらしき物は見つかりませんでした。

「ネオール？ どう？

開きそうな呪文が見つかりましたか？」

「はい！ 2つほどヒットしました！」

「よかったわ ネオール！

それなら早く唱えてみましょうよ！」

ネオールは扉に向い自信タップリに、
高く指を差しながら大きな声で叫びました。

> i 1 2 8 4 8 — 1 7 4 9 <

「ひらけーゴマ!?... シーン

もしや コマ?? ヘビかなあ??

... シーン

ならば! チチン〜プイプイ!?... シーン。

フイフイ? ポイポイ?? おかしいなあ?...

アグネス姫! 何故かダメみたいなのですが?..」

そんな誰もが知っているおとぎ話の呪文で、

簡単にこの扉が開くはずはありませんでした。

その時、突然テンが扉に向かって体当たりを始めました。

2人には聞こえない声が、まるで扉の中からテンを呼んでいるかのようにでした。

しかし大きな石の扉は、テンが体当たりしたぐらいではビクともしませんでした。

「そうだ! 湖の龍ならこの大きな石の扉を動かせるかもしれまん!?..」

「そうね・・・」

そう言いながらアグネスは電話で聞いた、
お父さんの話を思い出したのです。

「でも確か龍は！？・・・」

龍が湖を離れた時、

その不老の命も消えさり、

やがて息絶えるであろうと聞きました。

やっぱり、そんなことを頼んだら・・・

龍が死んでしまうわ・・・」

「アグナス姫！

でもこの扉を開けるには龍の力が必要なんですよ！」

アグネスは悩みました。

人々を野菜嫌いにさせて、
地球から野菜を消滅させようとしている魔女のたくらみは、
なんとしても防がねばなりません。
それでもアグネスは龍の住む湖を旅立つ時に、
2人の姿が消えるまで手を振っていた、
龍の優しい姿を思い出すと、
かわいそうで涙が出てくるのでした。
沸き上がる涙をぬぐおうと指が頬にふれたとたん、
龍から授けられた指輪が水色に光始めました。
龍の指輪は優しい愛の涙にふれた時、
龍の力を与える指輪だったのです。
指輪から水色の光が大きな渦になって、
洞窟の石の扉に向って飛んでいきます。
光の渦は石の扉に吸込まれるように流れていきました。

「アグネス姫！

見て下さい！！

光の渦の輪が扉の向こうまで繋がっています。

急いでこの中を通って行きましょう」

アグネスは指輪をテンに持たせ、
ネオールと水色の渦の中へと入って行きました。
渦の中はまるで、
水に包まれた道のようにでした。

龍の光は、

硬い石も水に変える不思議な力を持っていたのです。
扉の中は広く回りは天高くまで石で囲まれています。

空には星が輝き、

石の上に横たわる人影を、

月明かりがぼんやりと照らしていました。

「石の上に、誰がいるようです？」

「ええ私にも見えるわ・・・」

行ってみましょう」

2人は用心しながら、

そっと石に近づいて行きました。

近づくにつれ苦しそうな咳き込む声が聞こえてきます。

ネオールは石に登り気づかれないように覗きました。

そこには今にも息が絶えそうな、

白髪の痩せたお爺さんが横たわっていました。

ネオールは石を降り、

小さな声でアグネスに言いました。

「アグネス姫！

「もしやお爺さんは大蛇に捕まったのではありませんか？」

「ひどいわ！・・・」

大蛇が来る前に助けてあげないと！

ネオール急いで！！」

「解りました！」

ネオールは石に登り、

お爺さんを背負い降りてきました。

アグネスは美味しい野菜から煎じた元気のでる秘薬を、
少しずつ咳き込むお爺さんに飲ませました。

やがてお爺さんの咳はおさまり、

青ざめた顔に赤みがさしてきました。

意識を取り戻したお爺さんは2人を見て驚きました。

「お2人は何処からきたのじゃな・・・？」

それにしても、ありがたい」

そう言うとお爺さんは2人の手を握り締めたのでした。
アグネスは工場から、
まだ美味しくない野菜が無くなった理由や、
龍の住む湖に行ったこと、
この地に探しにきた愛の土の話をしました。
そして愛の土が見つかったら、
洞窟から一緒に逃げまじょうと言いました。
お爺さんは暫く目を閉じていましたが、
ゆっくり目を開けると2人に言いました。

「この洞窟に住みて、

あの日から2万年・・・

我が身も明日には天にのぼらねばならぬ運命なのじゃ

だが明日、

我が待ちわびた一瞬がやってくる！

我を封印した呪いは、

空を駆け天に登る間にとけるのじゃ！

2万年待ち続けた邪悪な人間どもへの復讐を、

明日こそ果たさねばならん！！」

「えっ！！・・・まさか！

お爺さんが 大蛇なんですか！？」

ビックリしたネオールが叫びました。

お爺さんは うなづくと大蛇に変身して見せました。

その昔、

大地は土から大地を守る大蛇を一番先に作りました。

そして人間を作る時、

大地は人々を正しく導くために大蛇に人の姿を与えたのです。

大蛇は人の姿に身を変えて、

人々を導き人々と共に暮らしていましたが、

邪悪な心を取り付いた人間達は、

大蛇が邪魔になり人の姿の時に毒をもらい、

この洞窟に連れ去り封印したのでした。

それから2万年、

邪悪な人間どもに復讐をする日が来るのを、

大蛇は待っていたのでした。

「お爺さん お願いです・・・

私の話を聞いてください！

お爺さんの言う通り人間は過ちを犯しました、

欲望のために戦争をし領土を奪いあい、

そして大勢の純粋な人々の命までも犠牲にしました、

でも今は違います・・・

気づいたのです！

人間とは何か、

そして平和がいかに大切なことなのかも！

だから復讐なんて、

もう必要ないんです！！」

涙をあふれさせながら、

アグネスは必死にお爺さんに頼みました。

> i 1 2 8 4 6 — 1 7 4 9 <

お爺さんは眉を細め2人に言いました。

「今日となつては、

もはやどうすることもできんのじゃ

されど・・・

お前達の話が正しければ、

世界は大地の望む姿になったのであろう。

ならば聞くがよい！

この先お前達が我の代わりに邪悪な人々を消し去る決意があるならば、

我の力をみずから封印し、

お前達2人にたくすであらう。

ただし、

お前達のどちらか一人でも邪悪な心に染まるならば、

お前達の肉体を奪い、

大蛇となりて地上のすべての物を消し去るであらう！

確か？

アグネスとネオールと申したな

どうじゃ よいか！？」

「はい！！ お爺さん誓います」

大蛇の復讐を止めることができたアグネスとネオールは、ホツとして顔を見合わせました。

この誓いが、やがて数々の試練を乗り越えるさせることになるとは、若いアグネスとネオールには知るよしもありませんでした。

「我の身こそが・・・」

大地から授かりし愛の土！

アグネスよ！

お前には大地から預かりし、白い生命の土を授けよう

ネオールよ！

お前には大地から預かりし、赤い大蛇の土を授けよう

今！時計の針が12時の音を鳴らす時、

我の霊が二つに別れ、お前達の力となるであらう

2人よ！ まかせたぞ！！」

アグネスとネオールを信じた大蛇は、
天に昇ることをやめ、

残された力を2人に託したのです。

そして12時の鐘の音と共に、

激しい砂嵐が巻き起こり、

砂嵐は大蛇の体を巻き込んで空高く舞い上がりました。

夜空の色が一瞬 白と赤に輝くと、

砂嵐と大蛇は消え去りました。

そして消えた大蛇の代わりに、

白と赤に輝くペンダントが残っていたのです。

白いペンダントには白鳥と4つの星が刻まれています、

赤いペンダントには2匹の魚と2つの星が刻まれています。

白鳥と4つの星には生命をつかさどる力がやどり、

そして、

2匹の魚と2つの星には大地と愛をつかさどる力があるのでした。

「テン！ カッコイイだろう？」

ホレ！ホレ！見たい？ 特別だぞ」

ネオールは赤いペンダントを胸に付け、

テンに見せびらかして喜んです。

アグネスは白いペンダントと水色の指輪を見つめながら、

使命の重さを感じて、

それどころではありませんでした。

そんなアグネスもネオールの笑顔を見ているうちに、

気持ちが少し楽になりました。
洞窟を出た2人はテンに乗り、
いよいよ魔女の住む北に向かって飛び立ちました。

「ネオール!？」

私には大蛇や龍の気持ちが解かる気がするわ」

「そうですね、

僕も今 考えていたところです。

人々は大蛇や龍を恐れていましたが、

ほんとうは、人々が地球に恐れられていたのじゃないかと・・・」

「ネオール・・・私なんだか怖いわ」

ネオールはアグネスの手をそつと握りしめました。
そして大蛇や龍の思いを強く心に刻むのです。

> i 1 2 8 4 7 — 1 7 4 9 <

4話 「アグネスの誓い」 (前編)

お楽しみに。

a
g
n
e
s

4話 アグネスの誓い（前編）

> i 1 2 5 4 0 — 1 7 4 9 <

「 野菜工場の少女アグネス 」

> i 1 2 8 4 7 — 1 7 4 9 <

4話・・・アグネスの誓い （前編）・・・

愛の水と土を手にしたアグネスとネオールは、
北に向かいながら王様に報告の電話をしました。

「 良くぞやってくれた！ 」

礼を申すぞ！！

生物はすべて古代から大地より生まれ、

神さえも大地が母であったと言われておる、

それに大蛇が神に姿を変えたと言う説もあるのじゃ、

しかし言い伝えでは人間の手により

処刑されてしまったのじゃが・・・。

人間の力を誇示する為に、

嘘を伝えたのかもしれない？

ところでアグネスよ

お前に言わねばならぬことがあるのじゃ・・・。

「お父様どうか、なされましたか？」

「実はな、妖精の森で

・・・

いや！やはりやめておこう」

王様は言いかけた話をやめました。

アグネスのお母さんは昔、

人間達が生きていくために大切な、

動物や植物そして森や水を育てる役目の、
妖精の国に暮らしていました。

王様の国は、

人間達が狩り以外でも生きていけるように
美味しい野菜や穀物そして果物を育てることが仕事でした。
そんなある日、

アグネスのお母さんと王様は湖のほとりで出逢いました。
やがて2人は愛し合い結婚しました。

そして王様と結婚したお母さんは王妃様になったのでした。
その頃の人間達は農地を耕し狩りをして、

自然を大切にして暮らしていました。

しかし知恵のある人間達はやがて工場を作り、
色々な物を開発しました。

そして緑を伐採し動物たちを山奥に追いやりながら、
どんどん工場を増やして、

水や空気を汚し、

地球を温暖化へと変えてしまいました。

王妃と妖精の国の人達は、

動物や植物そして森や水を守るために、

一所懸命頑張りましたが、

人間の作り出した機械に傷つき、

倒れてしまいました。

王様は急いで森に行き、

倒れていた王妃様を見つけ、

お城に連れてきましたが、

王妃様の傷は深く、

どうすることも出来ませんでした。

王様はアグネスに知らせようとしたが、

王妃様はアグネスに心配させぬよう、

野菜を取り戻すまでは黙っていて下さいと、

王様をお願いしたのでした。

王様は迷いましたが、

やはり王妃様の気持ちを思うと、

胸にとどめることにしたのでした。

> i 1 3 2 2 6 — 1 7 4 9 <

「お父様？　・・・？？」

「アグネスよ　聞くがよい！

今一番大切なことは野菜を取り戻すことじゃ・・・、

そして一刻も早く戻ってくるのじゃぞ！

よいか　アグネス？」

「はい！　お父様

必ず取り返して戻ります」

「ネオールや　アグネスをたのんだぞ

さあ　急ぐのじゃ！」

王様はそう言っていると電話を切りました。

「ネオール？・・・」

森に何かあったのかしら？」

「私にも解かりません

でも急いで野菜を取り戻し帰りましょう」

アグネスとネオールは王妃様の命が危険だとは知らずに野菜を取り戻しに魔女の家に向かいました。魔女の家の中では2人のけらいが、野菜を束ねては運んでいました。

「お前達！

朝の市場に間に合うように、

早く野菜を束ねるんだよ！！」

魔女は人間達の市場にマズイ野菜や米や果物をしのばせ、食物を嫌いにするつもりです。

そして王様の仕事を奪い、魔女の国にしようとしているのです。

> i 1 3 2 2 7 — 1 7 4 9 <

「魔女さま、

トマトはかがいたしましょう？

青いまだと、バレてしまいますぜ!？」

「この赤とうがらしのスプレーをぬるんだよ

キュウリには、青とうがらしのスプレー

間違えるんじゃないよ!

わかったら サッサとおやり!!」

「ヘイ! 魔女さま」

「これで、この国は私の思いがままよ!」

そう言いながら魔女は、大声で笑いだしました。

「そうはさせないぞー!!」

「野菜を返しなさい!!」

「誰だい!!　そこに隠れているのは・・・」

魔女が怒鳴りました、

ネオールとアグネスは勇気をだして魔女の前に姿をあらわしました。

「誰だと思えば、

坊やと小娘が野菜を返せと言っのかい？

オッホホホ・・・

生意気な!!」

「魔女よ、

こちらにいるのは王女のアグネス様だ！

おとなしく野菜を返さないと、

痛い目にあわずぞ！」

「オッホホホ！」

王女だか？

お嬢さんだか知らないけどねえ、

痛い目を見るのは

お前達だよ！」

そう言うとも魔女は杖を振り上げ何やら呪文を呟きました。

そして杖を振り下ろすと大きなネズミが現れネオールに襲いかかりました。

ネオールは赤い大蛇の力を使いネズミを退治しました。

魔女は慌てて毒矢を放ちました。

毒矢はネオールの胸に刺さりネオールは倒れてしまいました。

そして魔女は杖を振り下ろし、

今度はたくさんの狼コウモリをアグネスに襲いさせました。

アグネスは龍の力を使い、

水のカーテンを作り防ぎました。

そのまま苦しむネオールのもとに走り寄りました。

「ネオール！ シツカリして・・・」

「アグネス姫・・・」

このままだと2人ともやられてしまいます、

私にかまわず早くお逃げ下さい」

「あなたを置き去りにしてなど行けないわ！」

「何を言うのです・・・」

姫は将来この国の、

王妃様にならなければならないのです！

さあ 急いで立ち去るのです！！」

「嫌よ ネオール！」

もし私が王妃になるのなら、

あなたは、王子様になって下さい！！

あなたを愛しているの、

だから私のために生きて下さい！！！！」

アグネスとネオールは幼馴染でした。

2人はとても仲が良く、

アグネスは大きくなったら

ネオールのお嫁さんになるんだって、

いつもネオールに言っていました。

ネオールも優しいアグネスが好きでした。

けれど時が過ぎ、

身分の違いは2人を遠ざけてしまったのです。

ネオールの命の危険は、2人に真実の声を伝えました。

アグネスは白いペンダントに秘められた生命の力を使い、

ネオールの毒と傷を治しました。

こうしてネオールは王様との約束を果たし、

2人は愛の力を手にしたのでした。

ネオールは水のカーテンで魔女を囲むようにアグネスに言つと

その中に飛び込みました。

愛する者を救おうとする強さは、

どんなに大変な苦労も惜しまない愛の力に変わるのです。

そして水のカーテンを愛でいっぱいになると、

魔女をつつみ込みました。

愛に満ち足りた魔女の恐ろしい顔は、
優しい顔に変わり、魔女は気絶しています。

ネオールは急いで、愛の水を魔女にかけました。

魔女に取りついていていた悪魔が龍の涙と伴に消え去りました。
呪いがとけた魔女や手下達は、

何故ここに居るのか解からずキョトンとしています。

> i 1 3 2 2 8 — 1 7 4 9 <

「ネオール！ついにヤッタわね！！」

「はい！ 愛の力のおかげです」

「？・・・ え！もしかして・・・」

3つ目の愛って 愛する心の方だったのね。

何故お父様は私に言わずに、ネオールに言ったのね？」

「王様はアグネス姫に

愛を言うのが、恥ずかしかったようです。

それに・・・

先に嫌いと言われたら、魔女に勝てなくて困ります。

もつと困るのは、

僕が死ぬほど落ち込むでしょうからね！

あはは・・・」

「もうネオールったら！」

2人は照れ笑いしながらも、野菜を取り戻すことが出来て良かったとホッと胸を撫で下ろしたのでした。

<続く>

5話 「アグネスの誓い」 (後編)

お楽しみに。

a g n e s

5話 アグネスの誓い（後編）

「野菜工場の少女アグネス」

> i 1 2 5 4 0 — 1 7 4 9 <

5話・・・アグネスの誓い（後編）・・・

「アグネス姫様！ 大変で御座います！

私と一緒にお城へお戻り下さい！！」

野菜を無事に取り戻したことを知った王様は、
急いでアグネスを迎えに行かせたのでした。

「そんなに急いで、

いったいどうしたのですか？」

「王妃様が大変なんです！

詳しいことは、

戻りながら御説明いたします、

さあ 姫様！ 早くお乗り下さい！」

魔女から野菜を取り戻したアグネスは、

野菜工場で待っているカール叔父さんの元へ、

一刻も早く野菜を届けるように、

ネオールとテンにたのむと、

急いで王妃様の待つお城に戻りました。

道中で王妃様の話を聞いたアグネスは

お城に着くと急いで大蛇から受け継いだ力を使い、

王妃様の傷を治しました。

そして王様と王妃様に龍と大蛇から受け継いだ、

指輪とペンダントの不思議な力のことを話しました。

妖精の国から来た王妃様は、

アグネスの話を、

忘れかけていた秘密の伝承の書に刻まれていた、

一行の言葉を思い出しました。

その伝承の書には、

（やがて四精霊の力を持つ者が現れ、

妖精の泉を浴びて人となり地球を救うであろう）

と刻まれていたのです。

もしかするとアグネスとネオールが
地球を救う選ばれし者かも知れませんが、
そうであれば四精霊の話を、
アグネスに話さなければならないと、
王妃様は思いました。

> i 1 3 8 2 7 — 1 7 4 9 <

「これから言う母の話を聞いて下さい」

そう言うと王妃様は不思議な力にまつわる、
妖精の国に伝わる四精霊の話をアグネスにしました。

「私の生まれた妖精の国の伝承の書に、

四精霊となれし者の記述があります。

大地の神は生命を作る前に火を使い山を築き

水を降らせ湖や海を作り、大地に植物を作りました。

そして風を使い植物の種を、地球の隅々まで運んだのです。

大地の神は、その、水、火、風、地を守るために、

龍、光鳥、天馬、大蛇、を作り、その者達に地球を守らせました。

そして大地は人間を作る時、その守護者達を人の姿に変え人間を導く者としたのです。

しかしやがて人間達の手によって、葬られてしまったと伝えられています、

その者達の魂は、

水、火、風、地の精霊の姿となり、今も生き続けているのです。

しかし精霊となりし者は2度と精霊の姿では、

その地を離れ、生きて戻ることが出来ない定めなのです、

やがて精霊達は精霊と物質世界をつなぐ物質に姿を変え、

洪水を起こし、山を噴火させ、嵐を起こし、

大地を切り裂いては、今も人間達を懲らしめ戒めているのです」

「お母様！？　もしかして、

湖の龍が水の精霊・・・、

そして大蛇が地の精霊だったのですか？」

「そうですよ、アグネス！

あなたは今、水と地の精霊の力を手にしたのです。

もしも予言の通りなら・・・、

そしてあなたが選ばれし者なら、

あなたはこの先、火と風の精霊の力を受継がなければなりません。

そして地球を救うのです！

そのためには妖精の都に行つて、

妖精の都のはるか西にあると言われる、

光鳥と天馬の住む精霊の手がかりを探すのです。

もう時間がありません、

人間達の自然破壊や貧困に苦しむ人々の数は、私達の想像以上に進んでいるのです。

支度が出来次第、妖精の都に出向かなくてはなりません。

龍と大蛇の力を得ることが出来たあなた達なら、

必ずやり遂げられると、お母さんもお父様も信じています」

話終えた王妃様は、アグネスを見つめニッコリ微笑みました。

王様の人間を守る心と王妃様の自然を守る心の、両方の妖精の血を受け継いだアグネスは、

四精霊の力を借り、地球に住む人々と自然を救いたいと心に強く誓うのでした。

それから1ヶ月が過ぎ、妖精の都に旅立つ日が近づいて来ました。王様は国の政治をつかさどる全ての者たちをお城に集めました。

「我が娘のアグネスとネオールが力を合わせ、

北の魔女から悪魔を追い払い、

この国の危機と未来を救ったことは、皆も承知であろう！

よって余はネオールの功績に報いるよう、

国の平和をつかさどる、オルトの称号を与えようと思う、

皆の者！？ どうじゃな？・・・」

「王様！ それはなりませぬ！

国の祭りごとや人事は全て、

我々が、取り扱う決まりで御座います」

「だからこうして頼んでおるのじゃ？・・・」

「いくら手柄を立てたと申されても、

オルトの称号は代々国に仕える者のみが、

受け継がれる称号と決まっております、

しかもまだ、若輩者で御座います」

「何を申す！

この国を救った恩人を、決まり事で消し去れなどとは、

この国の何処の書物にも、書いてなどないぞ！

それとも若者には、任されぬと言うのか！？」

「王様！ 決してそのような事は御座いません、

・・・

王様！！　なにとぞお考え直してください！」

「何を考えると申すのじゃ！！

・・・ならばその上の！

王宮一族にあたいし、夢と未来をつかさどる、

テレサの称号を、王の王族に属する権限として、

即刻、ネオールに与えんとする。

よいか、早速！　国中の者たちに申し伝えるのじゃ！！」

「王様！！・・・それはなりません！！

ネオールは武術が得意とは言え、

民の息子の妖精で御座います。

そのような前例はありません、

まして称号を与えるなど、許されることはありません、

王様！？どうぞお考え直してください！！」

「お前達は何故に、前例にこだわるのじゃ！、

時代は流れておるのだぞ！！、

秩序は確かに大切だが、差別による秩序など、

この夢の国ではあつてはならんだ！

前例が無いと言うことだけで、

この国を変えずしてどうするのじゃ！！

・・・皆の者、ならば良く聞くがよい

皆も知つての通り、

明日、我が娘アグネスとネオールは、

王妃の意思を受け継いで、

自然と生物を守る妖精の国に、旅立つこととなった。

もし2人が試練を乗り越え、戻る日が来たその時こそは、

ネオールのさらなる偉業を認め、そして我に従うか！？・・・」

「王様！　もしもそれほどの者であるならば、

我ら一同も、王様のご意向に従います」

王様は皆の返事に、ホッと胸を撫で下ろしました。

やがて夢の国と妖精の国が、

テレサの称号を与えたネオールの働きにより、

一つになる日がこようとは、今はまだ王様さえもわかりませんでした。

翌日、王様と王妃様に見送られ

アグネスとネオールは西の都、妖精の国に向かい出発しました。

「ネオール？

私！絶対に精霊の力を手に入れてみせるわ！！、

そして精霊達の意味を継いで、

人間達に自然の大切さと、

平和や優しさの大切さを伝えるわ！、

だからネオールも、

私の力になって下さいね」

「はい！・・・」

辛く険しい試練が待っていると思いますが、

アグネス姫なら、きっと全てを成し遂げられると思います。

・・・それに！

アグネス姫が大好きな、僕がついていきますからね！

たぶん間違いないでしょう！？」

「もう！ ネオールったら！！」

「あははは・・・」

恥ずかしくなったネオールは、
顔を見られないように、サツさと歩き始めます。
アグネスも離れないように、
慌てて後ろからついて行きました。

朝の陽射しが露草に光り、
広い草原がまるで虹色のカーテンのように、
光、輝いています。

2人はまた新たな試練を乗り越えるために
見知らぬ都、妖精の国へと、
虹色のカーテンの中を、西へ向かって歩いて行きました。

> i 1 3 8 2 8 — 1 7 4 9 <

出逢い編・・・完

次回・・・旅立ち編

6話 「隠された伝承の書」
お楽しみに。

a g n e s

6話 隠された伝承の書

「野菜工場の少女アグネス」

> i 1 2 5 4 0 — 1 7 4 9 <

6話 隠された伝承の書

草原の丘を越えると、大きな森が見えてきました。
その森を越えると王妃様の故郷の西の都があるのです。
森の中を歩いていると

かすかな悲鳴が倒れた大きな木の下から聞こえてきます。
ネオールは大きな声で叫びました。

「だいじょうぶですか!？」

今すぐ木をどけますから

それまで我慢して下さい!」

倒れた木はとても大きく

ネオールの力では簡単には動きそうもありません。

「ネオール？」

何かいい方法があるのですか？」

「はい！」

僕にまかせて下さい！！」

そう言うネオールはロープを倒れた木の先端に結ぶと

そのままロープを伸ばし近くの太く高い木の枝かけ

その隣の木の上にロープを結びました。

そして木を降りると、森中にネオールの叫ぶ声が響きました。

「オリヤ〜！！」

ロープを結んだ木がネオールの放つ剣にゆっくり倒れ始めると
閉じこめ倒れていた木の先端が上に上にとあがっていききました。

「ネオール凄い！」

これって、テンビンとテコの原理よね！」

「そうです！

このテンビンとテコの知識があれば

力の無い子供達でも災害から大切な人を救うことも可能なんですよ」

> i 1 4 3 8 7 — 1 7 4 9 <

倒れていた木の下の窪みの中に、

衰弱し横たわる母と泣きながら寄り添う、少女メイリーの姿がありました。

ネオールは急いで2人を窪みから出すと、元気のでる野菜薬を飲ませました。

「メイリーさんもう大丈夫ですよ

お怪我はありませんか？

それにしてもいったいどうされたのです？」

「母と森の館に向かう途中急に嵐になってしまい

木の影で通り過ぎるのを待っている

突然落雷が木に落ちて倒れたのです

偶然窪みの中に落ち助かりましたが

この森と草原は東と西の都の掟により

電話が通じないので、誰かが助けてくれるのを

じっと待つしかありませんでした」

その昔妖精達は動物や植物そして森や水を守る役目の国と野菜や穀物そして果物を守る役目の国に別れました。

そしてお互いの平和のために王と国命を受けた者のみが森と草原を歩いて渡らなければならぬと掟めたのです。

「ところでお2人は・・・

何故この森においでになったのですか？」

「私達は伝承の書に書かれた

火鳥と天馬の住む精霊の手がかりを探しに

草原を越えて森を抜け西の都へ行く途中なのです」

「伝承の書ですか！？」

私は聞いたことがないのですが

今まだ眠っている母ならお城におりましたので

詳しいことを知っていると思います。

明日になれば話もできるでしょう。

そろそろ日も暮れてまいります

今宵は森の館にお泊り頂けませんか？」

深い森の夜は空がほんのり赤く染まり始めるとすぐに訪れてしまいます。

「ネオール、そうさせてもらいましょう。

お母さんを館までお願いしますね」

「はい、解かりました」

メイリー親子を救い出した2人は森の館に泊まることになりました。

「アグネスさん！

夕食の準備は私がしますから

ネオールさんとゆっくりしていて下さい」

「いいえ メイリーさん

先ほどお母様がお目覚めになったと聞きました。

私の国に伝わる元氣の出る玄米スープを

お母様に是非召し上がって欲しいの

だから一緒に楽しく作りましょうよ！」

「よろしいのですか？

それなら私は・・・

この国に伝わるお肉料理作ります。

ネオールさんに喜んで貰えるように

今日は特に腕を振りますね！」

「えっ！ ネオールって自惚れやすい性格なのよ

もしもお肉の話を知ったら

きつと勘違いするに違いないわ！

だからメイリーさん

普段通りでいいですからね！」

「そうなのですか??」

その時、隣の部屋からネオールの大きなクシャミが聞こえ
思わず2人は顔を見合わせ笑ってしまいました。

食卓にはたくさんのお料理が並び

メイリーに連れられ、お母さんも席に着きました。

席に座ったお母さんはアグネスとネオールにお礼を言いました。

「偶然とはいえ、これも何かの縁で御座いましょう。

暫くこの森の館でお過ごし頂けると宜しいのですが？

それにしても・・・

東の国の野菜薬は効きますね、

元気が体の芯から沸いてくるようです。

この野菜スープも私のためにアグネスさんが作って下さったと聞きました。

爽やかなレモンの香りがほんのりして、とても美味しそうね。

お2人には、なんてお礼を言っているのか言葉が見つかりません・・・」

「お礼なんてとんでもないです。

それよりメイリーお母様！

温かい内に野菜スープをお召上がり下さい。

私の国では誰にでも手に入る食材で、人々の健康を守ることが求め

られているのです。

その中でもスープは胃腸を促すものと言われています。

しょうが・大根・キュウリ・レタス・ネギから取るダシには

発汗性があつて食欲増進や消化吸収にいいのです。

さらに血行を促進してむくみを奪う力もあると言われています。

そして具と風味に使った、すりおろしたアスパラやレンコンと

潰した玄米とレモン汁や野菜シロップには滋養強壮や疲労回復に強い効果があるのです。

元気が無くなると母は必ず野菜スープを作ってくれるのですよ。

ちなみに野菜シロップの作り方は、野菜工場のホームページを参考にして下さいね」

「アグネスさん とても美味しいわ！

まるで温かいレモネードを飲んでいるようです。

これなら食欲が無くても進みますね」

ネオールは2人の話も聞かずに肉料理を、夢中でバクバク食べてい

ました。

「わゝ この肉料理なんて美味しいんだ！

メイリーさんが作ったのですか？」

「はい ネオールさん

今日は特別に腕を振るって作りました。

お口に合いますか？」

「合うなんてもんじゃないです。

もうメイリーさんこの味は最高ですよ！

・・・???イタタタッ
」

ネオールの足を誰かが踏みつけました。

横を見るとアグネスがムツとしてネオールを見えています。

ネオールはとっさにスープも美味しいと言いましたが、

今更手遅れだということは、見ていたメイリーの目にも明らかでした。

そして3人の笑いとともに、森の館の楽しい夜がふけていきました。

翌朝、元気を取り戻したメイリーお母さんがアグネスとネオールを部屋に呼びました。

「メイリーから伝承の書に書かれた

光鳥と天馬精霊の手がかりを求めこの地に来たことを聞きました。

アグネスさん

実はもう・・・お城には伝承の書はないのです！

何者かがお城に忍び込み伝承の書を奪ってしまったの・・・

今でも国中の家を調べてはいますが、

何処か別の場所に隠したらしく

今だ手がかりさえも発見されていないのです。

伝承の書がもしも悪い人の手に渡れば、この国は大変なことになるわ。

王様は心配から体調を崩されてしまったのですよ」

「ほんとうなのですか!？」

・・・私達はお母様から

伝承の書の中に、精霊達の手がかりがあると聞いてきたのです。

その伝承の書がもうないなんて・・・」

「あっ! そうだわアグネスさん!

一つだけ精霊達の手がかりを知る方法があるかもしれないわ!

西の都にマーザと呼ばれる私の義母が住んでいます。

マーザは昔お城の図書館長を勤め

彼女の頭の中には、国中の書物が刻まれていると言われています。

マーザお婆さんなら、きっとあなた方のお役に立てると思うわ。

・・・

でもこの国の知識の泉でもあるマーザお婆さんに会うには

王様の許可した者が、血族でなければなりません。

王様は今まだ床に伏したまま、お会いすることは暫くは無理でしょう。

ですからマーザお婆さんの血を受け継いだ

娘のメイリーと一緒に連れて行って下さい。

娘のメイリーの亡き父は、マーザお婆さんの息子なのです。

きっとアグネスさんのお力になれるでしょう。

メイリー　そうしてくれますか？」

「はい　お母様！

母と私の命の恩人ですもの、急いで支度をして参ります」

支度を整えた3人はメイリーお母さんに見送られ

鳥たちの歌う森の中、メイリーを先頭に仲良く歩いて行きました。

「ネオール？　とても楽しそうですね？」

「わかりますか？

実は昨夜の肉料理があまりに美味しかったので

お母さんに聞いたところ

僕のためにメイリーさんが作ってくれたらしいのです！

いやゝ さすがメイリーさんですね

男を見る目があると言つか！

僕がカツコ良過ぎるからなのか！

もしかすると両方かも！？ あははは・・・

アグネス姫も、そうは思いませんか？」

「もう！ ネオールつたら！！

いい加減にしないと許さないわよ」

「あつ イタツ！

足が・・・イタタタタ！！」

ネオールの悲鳴にメイリーが振り向きました。

「アグネスさん？」

ネオールの足の足？どうかなされましたの」

「いつもの病気がでたみたい

教えてあげるから私と先に行きましょうよ」

ネオールの話題にメイリーの笑い声が静かな森の中に響きました。

> i 1 4 3 8 9 — 1 7 4 9 <

こうして新しい友達のメイリーに出会う事が出来たアグネスとネオールは

森を越えマーザお婆さんの住む西の都に向うのでした。

次回

7話・・・虹に消えた光鳥・・・

お楽しみに

agnessu

7話 虹に消えた光鳥

「野菜工場の少女アグネス」

> i 1 2 5 4 0 — 1 7 4 9 <

7話 虹に消えた光鳥

森を越えると、西の都が見えてきました。
メイリーはアグネスとネオールを都に待たせて、一足先にマーザお婆さんの家に行きました。

「マーザお婆さんの孫のメイリーで御座います

お婆さんにお会いしたいのですが？」

「聞いて参りますので、暫くお待ち下さい」

門番は戻って来ると、マーザお婆さんの部屋にメイリーを案内しました

「メイリーよく来てくれましたね、お母様はお元気ですか？」

「はい お婆様、母も元気に過ごしております」

「それにしても急に一人で来るなんて

メイリー！？ 何かあったのですか」

メイリーはアグネスとネオールに助けられたこと
そして伝承の書をに刻まれた手掛りを知るマーザお婆さんに会った
めに来たことを話しました。

「アグネスさんのお母様のおっしゃる通り、

ここでは王様のお許しがないとお会いする事ができません

でもアグネスさんは、私の可愛いメイリーの命の恩人・・・

・・・あ！そうだわ！メイリー 裏の洞窟は知っていますね！？

陽が沈んだら裏の洞窟で待つて居て下さるように伝え下さい」

「はい お婆様！そのようにお伝えします」

メイリーは都で待つアグネスとネオールのもとへ戻り夕暮れを待ち洞窟に向かいました。

暫くすると身を隠すようにしてマーザお婆さんが洞窟に入って来ました。

そしてアグネスの指に輝く指輪と2人の胸に輝くペンダントが、水と地の精霊の使者と認められた証だとマーザお婆さんは直ぐにわかりました。

「お話は孫のメイリーに聞きました

伝承の書に書かれている西の精霊について私の知っている事をお話しましょう

アグネスさんのお母様が言っておられた妖精の都のはるか西にあると言われる精霊の手掛りの場所は伝承の書に霧の滝と書かれています

そして滝から昇る虹の先に西の精霊達が住んでいると言われています

ただし霧の滝への道は一年中濃い霧に包まれ、一旦濃い霧の中に入った者は迷い二度と生きては出れぬ所です

もし運良く霧の滝にたどり着き虹を見る事が出来たとしても、精霊の証がない者は虹を渡ることが絶対に出来ないのです

でもすでに水と地の精霊の証を受継いでいるお2人なら、その精霊達がきつと西の精霊の地へと導いてくれるはずです

伝承の書に刻まれていた霧の滝までの地図を思いだし、描いておきました

これで迷わず霧の滝までたどり着くことが出来るでしょう

けれど一つだけ気がかりな事があるのよ・・・

お城から消えた伝承の書の行方が今だに解からないのです

もしかすると、お2人の事を知った何者かが伝承の書を盗み出し、

精霊を捜し旅するお2人から今ある精霊の証を奪い取ろうとしているのかもしれないのです

アグネスさん！もう夜も更けてきたわ

夜道は危険なので今宵は都に泊まり、明日明るくなってから霧の滝に旅立つ方が安全でしょう」

「お婆様！ 大変です！！」

「メイリー どうしました！？」

「警備の者がお婆様を探しています

ここで見つかると大変です、急いで帰りましょう」

マーザお婆さんは地図をアグネスに渡し、メイリーと見つからぬように家に戻りました。

アグネスとネオールが洞窟を出で歩いているとアグネスの電話が鳴りました。

「メイリーです、都にチャチャホテルと言う

お婆様の娘チャチャの宿があります

連絡をしておきましたのでお泊り下さい、私も後で伺いますね」

2人の身の危険を感じたお婆様が、メイリーに今宵の宿を手配させたのでした。

「いらっしやいませ!」

「アグネスと言いますが・・・チャチャさんですか？」

「はい、メイリーの命の恩人のお2人と久しぶりにメアリーに会えるのを楽しみにお待ちしていました

夕食のしたくが出来るまで部屋でゆっくりくつろいで下さいね」

チャチャは2人を部屋に案内すると、夕食の用意に戻りました。

部屋に入り、マーザお婆さんの書いてくれた地図をネオールがテーブルの上に広げました。

「ねえネオール!？」

霧の滝まで歩いて行くには10日ほどかかりそうですね」

「そうですね・・・テンが居てくれたら早いのですが・・・

西の国にテンを連れて来ることは許されないので歩くしかありません
西の国の妖精達には羽があるから簡単に霧の滝近くまで行けるのになあ」

「そうね、でも仕方が無いわ

私達の国にはホタルのテンやリンが居るんですもの」

「あ！ そうだアグネス姫！

ダイエットだと思えば丁度いい機会かも知れませんよ！？」

「そうね？？・・・

もう ネオールつたら！どうせ私は太ってますよ！！」

「あわあわあ・・・ダイエットは一般論で

・・・あくまで健康のためですから」

「じゃあなによ！いい機会って！

そんな言い訳は、今更遅いわよ！ プン！プン！！」

アグネスは怒って部屋から出て行ってしまいました。

そして暫くすると笑いながら戻ってくる、アグネスとメイリーの声が聞こえてきました。

「ネオールさん　こんばんわ

アグネスさんと喧嘩したらしいですね？」

「え！　聞いたのですか

・・・メイリーさん　助けて下さいよ？」

そう言うときメイリーの後ろに隠れました。

「アグネスさんは、もう怒ってはいないみたいですよ！

いつものことらしいので・・・ねえ？」

「ネオール　もういいわ

そんなことより夕食の用意ができたので呼びにきたのよ、行きましよう」

それを聞いてホッとしたネオールのお腹の虫がグーグー鳴りました。食事を済ませアグネスとネオールが先に部屋にも戻ると、メイリーとチャチャが大きな箱を持ってきました。

「アグネスさん お婆様からこれを預かってきました

これは私達妖精の羽を集め、作られた空飛ぶ羽です

私の国では自分の羽が傷つき、飛べぬようになるとこの羽を着けるのです

お2人が向かう霧の滝までは遠く険しいので、お婆様がお渡しになったのですよ」

「メイリー ありがとうございますわ！

マーザお婆さんに宜しくお伝え下さい」

「アグネス姫！ これがあれば10日も歩かないで済みますね

でもせつかくのダイエット　あつ！健康がダメに・・・何でもないです・
・・・あはは」

「もう！　ネオールつたら！！」

あははは・・・皆の笑い声とともにチャチャホテルの楽しい夜が更けていきます。

翌朝アグネスとネオールはメイリーとチャチャに別れを告げはるか西にあると言われる霧の滝を目指して飛びたちました。

「アグネス姫！霧がかかって来ました

霧の滝の入口に着いたようです、ここからは歩いて行くしかないでしょう」

「そうね、陽もかげろうとしているし

今晚はここで寝て明日、明るくなったら探しましょう」

2人は霧の手前の森の中で一晩を過ごすことにしました。

翌朝、霧の滝までの地図をたよりに深い霧の中を歩いて行くと急に

霧が薄くなり空が明るくなり始めました。

そして目の前に新緑に輝く高くそびえる山々とその山の谷間から雄大に流れ落ちる幾千本もの滝が見えてきました。

> i 1 5 0 5 7 — 1 7 4 9 <

「アグネス姫！　ここが霧の滝に間違いなさそうです

それにしても不思議ですね、ここだけが霧が晴れているなんて？」

「ネオール？・・・マーザお婆さんが言ってらしたわ

霧の滝は精霊の地に行く唯一の道だと

しかも撰ばれし者だけが進むことを許される道だって！

きつと深い霧に包まれて出来る虹は、精霊によって守られているのよ」

「あ！そうか！精霊が消える時、深い霧も精霊の地に行く道もすべて消えてしまうんですね！」

「ええきつとそうよ

それにしてもマーザお婆さんの言っていた虹はいつたい何処にあるのでしょうか？

たしか私達の受継いだ水と地の精霊の証で虹を渡ることが出来ると言っていたわ」

虹を求め2人は別々に滝の廻りを探すことにしました。

「キヤー　ネオール！助けて〜！！」

ネオールの耳にアグネスの悲鳴が聞こえてきました。

「誰だ！　アグネス姫を離さないと許さないぞ〜！！」

「オオーツホホホ！　坊や、その胸のペンダントを渡しなさい！

そしたらこの娘を、返してあげるわよ〜！！」

「なにい〜　あ！　お前達だな〜！！

お城から伝承の書を盗んだのは！ 何をたくらんでいるんだ！！」

「坊やは知らないのかい！？ならば教えてあげるわ！

4つの精霊の力があればこの国や、お前達の国もそして人間をも支配することもできるのよ！

さあ早く寄こしなさい！ さもないと この可愛い娘の命はないわよー！！」

「ネオール！！渡しちゃダメよ！

私の命より精霊との約束のほうが大切なの！

しかも精霊の力を悪に利用するなんて許せないわ！！

だからネオールだけは逃げてー！！」

「オオーッホホホ 坊や後ろを見てご覧！

お前はもう袋のネズミだよ！ あきらめな！！」

ネオールはいつの間にか大勢の手下達に囲まれ逃げることもさえできませんでした。

その時です！取り囲んでいた手下達の上に雨のように矢が降り、手下達がバタバタと倒れていきました。

そして掛け声とともに大勢の騎士が押し寄せてきました。

悪人達の武力では鍛えられた大勢の騎士にはかないません、悪人達は慌てふためき逃げ出して行きました

ネオールもアグネスを捕らえていた手下を追い払いアグネスを助け出しました。

「ネオールさん！」

「あ！メイリーさんにマーザお婆さんじゃないですか！」

声に振り向くとメイリーとマーザお婆さんの姿が見えました。

マーザお婆さんは必ず天承の書を盗んだ者達がアグネスを追ってくると思い

天承の書の行方を捜していた騎士隊をお城に呼び戻し急いでアグネスの後を追って来たのでした。

悪人達の話をしていると、騎士隊長がマーザお婆さんに近寄ってきました。

「マーザ様、捕らえた悪党どもの持ち物から天承の書が見つかりました！」

しかし身軽な悪党どもの逃げ足が速くて捕らえることができませんでした」

「隊長さんご苦労様！悪党どもの心配はいらないわ

天承の書がなければ生きてこの森を越えることは出来ないのですから

それよりも天承の書をお城に届け、王様をご安心させて下さい！」

私はもう暫くここに用事があります、皆を連れ先に戻って下さいね」

「かしこまりました、マーザ様もお気をつけてお戻り下さい」

マーザお婆さんは騎士達を先にお城に帰し、無事に虹を渡るアグネス達を見届けてから帰ることにしました。

けれどマーザお婆さんにもいつ虹が出るのかは解かりませんでした。

虹は太陽光線が朝夕近くにあり、雲がなく空中に水滴があると反射して出来るのです。

廻り中深い霧で覆われ真上からの太陽の光しかあたらない霧の滝にはできません。

「マーザお婆さん！？霧の滝に着いてからネオールと虹を探してみましたが見つかりませんでした」

この地で虹が本当に出るのでしょうか？」

「私にも解からないわ・・・」

けれど伝承の書には間違いなく、そう書かれているのです

暫く待つしかありませんね。」

アグネスの心配をよそに、ネオールとメイリーのお喋りと笑い声が聞こえてきます。

「今度見に行きませんか！？結構ロマンチックなんですよ！」

「見てみたいわ！ネオールさん是非連れてって下さいね」

「了解です そうだ！メイリーさんのメルアド教えてくれません

か？」

「ネオール！？ 何してるの！！」

しかもメイリーさんのメルアド聞いてどうする気なのよ！」

突然ネオールの後ろからアグネスの怒声がしました。

「あ！姫！！ それはその・・・あわあわわ・・・」

しどろもどろしているネオールの代わりにメイリーが弁解しました。

「アグネスさん、ネオールさんが夜も虹が出るって教えてくれたのです」

そして今度、夜の虹を見に連れて行ってくれるって言つのでお願いしていたの

きつとそれでメルアドを聞いたのだと思いますわ！？・・・」

「ネオール ほんとうにそれだけなの!？」

「やだなあ もちろんですよ 姫! 虹鑑賞の連絡ようにですから・
・あはは」

虹は条件がそろつ場所であれば、月の明かりでも見ることが出来るのです。

「あつ!？ ネオールそれなら!？ この霧の滝でも見れるかもしれないわね？」

「そうですね! 滝から落ちるシブキは絶える事なく空まで繋がっていますし

もしかすると虹は夜なのかも知れませんか!？」

「きつとそうよ! 私、マーザお婆さんと呼んできますね」

アグネスはその事をマーザお婆さんに話し、皆は夜になるのを待つ

ことにしました。

そして陽が暮れて月が昇り、やがて月も消えていこうとしています。

「おかしいわねえ？虹がでそうもないわ・・・」

アグネスは消えていく月を見ながら呟きました。

そして月明かりで虹が出ると期待していたアグネスは勿論のことメイリー、マーザお婆さんの視線までもが、ネオールにはヒシヒシと感じました。

「あゝヤダなあ・・・僕のせいじゃありませんよ

・・・ほんとうに月明かりでも虹は出来ることがあるのですから・・・」

「待つしかないわね・・・」

マーザお婆さんが言いました。

皆の顔に不安がよぎり、沈黙が続きました。

「アグネスさん！？ あれを見て！」

メイリーの指差す先の森の木々の間に何やら小さな灯りが舞始めました。

木々の間の小さな灯りは次から次と増えて霧の滝を囲むように増えていきました。

そして灯りが次から次へと滝のシブキから舞上がる霧の中へと吸い込まれていきます。

数え切れぬほどの小さな灯りは霧の水滴に反射し七色に輝きを増しながら天高く伸びていきました。

小さな灯りが一つアグネスの指輪にとまりました、すると指輪が淡い水色に光始めたのです。

「ねえ皆！？ 見て！ これはホタルよ

小さなホタルが集まり虹を作っているのよ！！」

アグネスは興奮しながら皆に言いました。

> i 1 5 0 5 8 — 1 7 4 9 <

伝承の書に書かれた霧の滝のすべての謎がマーズお婆さんには見えてきました。

「そう言えば精霊はその地を離れることが出来ない代わりに他の物質や生物をあやつる力があることを忘れていましたわ

精霊へと導く虹は精霊にあやつられたホタルが作り出す虹だったのね！

アグネスさん！

あなたの指に輝く龍の指輪と胸に輝く大蛇のペンダントの星が、お2人をホタルとともに精霊の地に導いてくれるでしょう

虹が消えぬうちに！ さあ早く！ 急いで行くのですー！！」

2人はマーザお婆さんとメイリーに別れを告げ、空に舞い上がりました。

「ネオール！行くわよ」

「はい！姫様」

「龍よ大蛇よ！ 私達をホタルとともに導きたまえー！！」

アグネスの声に指輪が更に青く輝き2人を包み、ペンダントの星の光が2人を白銀に染めていきました。

> i 1 5 0 5 9 — 1 7 4 9 <

「お婆様！？お2人の姿が・・・まるで！虹の中に溶けてゆくようです」

「西の精霊達に会うことが認められた証、お2人の姿が虹と一つになられたのよ！

けれど4つの力を受継がないと戻る事の出来ない空間でもあるのよ」

「お婆様！そうなのですか？」

「伝承者となれぬ者を精霊達は生かしては返さないでしょう
もう自分の力で虹を作り戻るしか道は無いのです」

メイリーはとても心配になりました。

「幸せと笑顔を待っている皆のためにも、2人力を合わせ1日も早く戻ってきて下さい」

虹に届くような大きなメイリーの声にネオールの元気な返事が聞こえた様な気がしました。

そしてマーザお婆さんとメイリーは、願いを込め虹が消えるまで2人を見送っていました。

こうして無事に霧の滝を渡ることが出来たアグネスとネオールは、まだ誰も知らぬ西の精霊達が住む未知の世界に足を踏み入れたのでした。

「ネオール！？ あれは何かしら？」

「あ！アグネス姫 あれは！！」

・・・

次回 8話・・・浮かぶ2つの球・・・

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1567o/>

アグネス文庫 「野菜工場の少女アグネス」

2011年10月4日09時58分発行